

## 移住労働者の日本語習得研究：あるインドネシア人コミュニティでの調査から

吹原 豊

本研究では、茨城県東茨城郡大洗町に集住し、就労するインドネシア人移住労働者の日本語使用と日本語習得の実態について総合的に考察した。まず、明らかになったポイントを章ごとに見ていきたい。

I章では、本研究に関わる先行研究について、それらの貢献と問題点を示した。大洗コミュニティ成員における日本語習得は、成人の第二言語習得（その中でも自然習得）に関わるテーマである。しかし、それを理解するためには、第二言語習得が単線的で時間軸に沿って生じるものであるとするこれまでのリニア（単線的）な言語習得観を乗り越えた多角的な言語習得観が必要であると考えた。そこで、Lave and Wenger（1991）の正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation、以下 LPP）に代表される状況的学習論を手掛かりにすることにした。その上で、本研究の研究目的を「大洗コミュニティに属するインドネシア人移住労働者の日本語習得の促進・阻害要因の解明」とし、さらにその研究目的をいくつかの側面（リサーチ・クエスチョン）に分ける形で設定した。

II章では、調査対象地域などについて説明するとともに、調査方法についてやや詳しく説明した。

III章では、大洗コミュニティの成員の日本語使用と日本語習得について理解するため、コミュニティの成り立ちとその機能、成員の社会文化的背景について述べた。また、コミュニティの成立と発展の歴史的経過を明らかにした。

IV章では、大洗コミュニティ成員向けの日本語教室に着目し、日本語学習への取り組みの歴史的な変遷を述べ、近年の新たな取り組みについて述べた。

V章では、まず、大洗コミュニティ成員の日本語習得の実態を知るために行った各種テストのうち、語彙テストと OPI（Oral Proficiency Interview）の結果について述べた。それらの結果、大洗コミュニティ成員の大多数の日本語能力が初級の範囲にとどまっていることと、滞在期間の長短で OPI の到達レベルに差が出るとは言えないことが確認できた。次に、そうした実態の原因を探るために、労働場面お

よび日常生活場面での参与観察を行い、移住労働者の言語使用の実態をふまえた考察について述べた。

VI章では、大洗コミュニティ成員の日本語習得過程について理解するため、OPI の中級話者を対象とし、日本語習得の促進要因に関する分析を行った。その一方で、初級話者を対象とした日本語習得の阻害要因に関する分析も行った。促進要因の分析にあたっては、主に M-GTA による分析を行い、大洗コミュニティの移住労働者が日本語中級話者になるプロセスを明らかにした。阻害要因に関しては初級話者および関与者に対する聞き取りに加え、長期にわたる参与観察データによる分析を行った。そして、最後に本研究の結果を状況的学習論から見た日本語習得過程としてまとめた。そこではまず、初級話者の困難への実際の対処法について述べた。次に、大洗コミュニティ成員を取り巻く状況を状況的学習論の中の正統的周辺参加の観点から読み解いた。そして、状況を改善するための手掛かりとして、ドイツや韓国での取り組みについて述べた。さらに、それを踏まえて、大洗コミュニティを対象とする公的支援について検討し、提言を加えた。最後に、現在大洗町で行われている「まなびの輪」による実践が多角的言語教育観の中でも特に状況的学習論に基づく日本語習得の実践の場としてどの程度成果を上げているのかについて検討した。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ①大洗コミュニティ成員にとって、職場はホスト社会の成員との関わり合いの中で行う貴重な社会的実践の場であり、実践共同体である。そこにおいて状況に埋め込まれた学習が行われている。
- ②大洗コミュニティ成員の職場における「状況」は、多くの場合、非熟練労働の現場作業であり、そこへの参加も、参加に伴ってもたらされる学びも通常は自分のすべき非熟練労働がこなせる範囲に限定されたものととどまっている。
- ③大洗コミュニティの成員にとって、日本語話者との主な接触場面である職場において、職場側と移住労働者側双方の期待値と実際に投入できる労力、時間、資金などとの折り合いの中で、到達ラインが設定されている可能性がある。言い換えれば、彼らの実践とそれに伴う日本語学習と日本語の使用機会に関わる問題は、彼ら自身をも含めた実践の参加者によって「デザイン」されたものであると考えられる。
- ④OPI 調査 (N=100) において、95%が初級話者であり、そのうちの 63%が初級-中であったとい

う結果は、そのレベルが状況に埋め込まれた学習による到達点とある程度重なっていることを示唆している。

⑤中級話者の場合は、ネットワークが大洗コミュニティに限定されておらず、ホスト社会と関わる複数の実践共同体での正統的周辺参加に一定程度成功している。そして、その結果が中級話者としての現在の姿である。

⑥中級話者には正統的周辺参加を経て形成された「日本語ができるわたし（自己認識の変化）」という熟練のアイデンティティの萌芽も見られる。

以上のような、大洗コミュニティの成員の社会的実践へのアクセスや参加が彼らによる日本語習得の成否と結び付いているという本論の結果は正統的周辺参加の教育観を言語学習において示した例となっている。それによって、大洗コミュニティのような環境下において、現在まなびの輪が行っている地域日本語教室などの実践を含め、日本語習得を成功させるためのいくつかの手だてを示すことができた。